

越沼初美

TOKUMA NOVELS

書下し長篇ハードボイルド・ミステリー

ギムレット・カラーに染めちやつて





TOKUMA NOVELS

越沼初美

ギムレット・カラーに染めちやつて

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

© Hatsumi Koshinuma 1989

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

編集担当 池田孝之

ISBN4-19-153908-6

書下し長篇ハードボイルド・ミステリー

ギムレット・カラーに染めちやつて

燧沼初美



同書店

TOKUMA NOVELS

ギムレット・カラーに染めちゃって

目次

第一章 『LINDY』の夜……………9

第二章 誘拐の鐘の音……………27

第三章 赤レンガ倉庫に死の香り……………43

第四章 チャイナタウンで裏ビデオ……………59

第五章 本牧の危険な男……………77

第六章 スージー帰る……………93

第七章 ヘンリーの女とストリップ・ボーイ……………108

第八章 スタームルガーマークI 130

第九章 美しきLADY 146

第十章 死の香りが再び漂^{ただよ}った 164

第十一章 危機一髪 177

第十二章 Shake Shake Shake 192

第十三章 ラスト・ギムレット 210

あとがき 228

本文挿画・ひろき真冬

第一章

『LINDY』の夜

1

八月最後の日、蒸し暑い夜だった。

暗い部屋の中、天井に備えつけられている大型扇風機が軋^{きし}んだ音をたてながら、くるくると回り、うす汚れたクリーム色のブラインドには、通り向かいの赤や緑のネオンがチカチカと照らし出されていた。ブラインドを背にして、黒檀^{こくなん}のどっしりした机があり、その上には、くしゃくしゃになった報知新聞、きゅうりのピクルスをしつかり残したハンバーガー

の食い残し、そして吸い殻がこぼれ落ちているアルミの灰皿……。

そのほか、雑誌等のもとより、ガイコツブラシ、鏡、スタイリング・フォーム剤などがしつ散らかっている。

平沢美樹^{ひらさわみき}はその机にうつぶして、ガーガーとうるさい寝息をたてていた。

机の右端に置いてあるラジオは、巨人―中日の二十回戦の模様を報じ、桑田―近藤^{こんどう}の若武者対決、0対0の四回表の攻撃、ツーアウト・ランナー一、三塁のところまで原^{はら}が打席に入った。

——今年の原はチャンスに強い。本物の四番打者です。

——そうですね。昨年までの「大負け試合に燦然^{さんぜん}と輝く原のムダ打ちアーチ」ということは失くなりましたモノね。

——さあ、巨人、先取点のチャンスです。近藤、セツト・ポジションから第一球を投げました。原が打ったあ!! ボールは高あーく夜空に上がり、ぐんぐんと伸びていくウ。

美樹はアナウンサーの絶叫の声にパッと目覚め、ラジオを両手で抱えた。

——大きい、大きい。入るか、入るか。あつ、入りましたあー!!

美樹はコブシをギュッと握りしめ、思わずガッツ・ポーズをした。しかし、続いてアナウンサーの「入りました。ボールはキャッチャー中村のミットにスッポリと入りました」という声で、「おい、おい、おい」となった。

——イヤー、驚きました。

——本当ですね、私も長年、野球にたずさわってきましたが、こんな大きなキャッチャー・フライを見たのは初めてです。

——巨人、惜しい^あチャンスを逃がしました。

「Son of a bitch!!」

美樹はラジオに向かって叫んだ。

大げさな放送をしやがって。

こりゃ、抗議の電話をせねばと思い、美樹は黒いダイヤル式の電話器に手を伸ばした。

その時、ジリリリッとTELコールが鳴り響いた。彼はピクツとなった手を、電話器に備えつけられている録音機に向けるとスイッチを押し、それからゆつくりと受話器をとった。

「はい、こちらディテクティブ（探偵）・オフィス、ゆでたまご」

——……………。

相手は何も言わない。ただ、かすかに受話器の向

こうから、ウィーン、ウィーンというモーター音が聞こえてきた。

美樹も黙っていた。

やがて相手が口を開いた。

——あなた、探偵さん!?

女の声だ。

それも、ローレン・パコルを髣髴^{ほうかく}とさせるようなハスキーでセクシーな声。

飛びきりいい女の声だ。

そして、事件の匂いを漂^{ただよ}わせている。美樹は緊張して生ツバを呑み込んだ。

「ああ。何かお困りですか?」

——そーなの。私、とっても困っているの。あなた、この音きこえてる?

怪しげなモーター音がだんだん大きくなってくる。

「聞こえるヨ」

——そう。これ、実は電動コケシの音なの。

「……………」

——今、私の中に入っているのヨ。はあ、はあ……とっても気持ちいいわ。あなた、感じる? 感じてたら、何かイヤラシイこと言ってちょうだい。お願い。はあ、はあ、あつはあーん。

「おしり」

それだけ言うと、美樹は静かに受話器をきった。

つたく、ロクなモンじゃない。

本日、三回目のイタズラ電話だ。

美樹はブツブツ呺^{つおや}きながら、不覚にもほんのちよこつとボッキしてしまった股間^{こかん}を抑え、腕時計をのぞき込んだ。

七時二十七分だ。

さてと、ボチボチ帰るか……。本日の仕事は終わり終わり。

留守番電話をセットしようと、手を伸ばしかけた時、再び、ジリリリーっとベルが鳴った。

今度はマリリン・モンローのように甘ったるしくかわいらしい女の声だ。

すぐやらせそうで、ナカナカやらせてくれない。
そんな感じの女の声だ。

——お願い、助けて。急ぎの仕事なの！

受話器の向こうから、声とともに荒い息づかいが聞こえてくる。

——電話では話せないから、今夜八時、本牧の『LINDY』にきて！

「それじゃ困る。いったい、どういう用件だ？」

——それは会ってから。仕事、引き受けてくれた報酬はすむわヨ。もちろん、私の現物支給づきでね。

「ちよ、ちよい待ち……」

電話は切れた。

本心を言えば、美樹は家に帰ってゆっくりとナイターを観たかった。

しかし、ノドから手が出るほど、金が欲しかったし、現物支給というのも受けてみたかった。

もつとも、こちらが金を貰って抱きたくないよ

うな化物じゃ、ジョーダンじゃないが……。

とにかく行ってみようと美樹は思った。

BUT.

もうひとつ、気になることがある。『LINDY』だ。

あそこには二度と足を運ばないと決めたのに。

あそこに行つたために、自分の人生は大きく変わってしまったのだ。

美樹は部屋をでると、階下に降り、漢方薬店の店先に止めてある1940年型ブラウンのおんぼろビュイックに乗り込んだ。

そして思いっきりアクセルを踏み込みながら、チャイナタウンを飛び出していった。

エアコン装備をしていないので、窓は全開だ。

カー・ステレオは三日前に壊れてしまった。

美樹はラジオのスイッチを入れた。

本当は野球放送の続きを聞いたかったのだが、ち

ようど萩野目洋子の歌が流れてきたので、局を変えずにそのままにした。

美樹、萩野目洋子の眉毛がいかにかわいくて魅力的であるか、原稿用紙五枚は書ける自信を持っている。

窓から左手に見える景色は、不気味なほど静まり返っているコンテナ倉庫街で、その向こうには横浜港が広がっている。

異国情緒に溢れ、オシャレな街だと思いが、なかなか落ち着かない。

昔、サザンが、

へヨコハマ、ちよいと程良くナ、漂うだけの街と歌っていたが、アレは本当だ。

二年前、初めてこの街に来た時は、「オレが求めているのはコレよ。この雰囲気ヨ!!」と心の中で叫んでしまったモノだが……。

2

二年前——美樹は早大商学部の三年生だった。

スラリとした肢体にキメの細かい肌、絹糸のような髪はクセがなく、ちよい前髪を長めにカットしてあった。

目鼻立ちはこれ以上、整いようがないくらい整い、全体にちよつと気取った雰囲気漂っていた。

外人の女が彼を見たら、「OH!! オリエンタル・ビューティー!!」と叫んで目を大きく見開くぐらい、美樹は天下の大日本帝国美男子だ。

ジョン・ローンと比べても、まったく見劣りがしないどころか、口が横に拡がっていない分、美樹の方が上かも知れない。

そんな美樹だからモテないワケがない。まして、そのときアルバイトで六本木のディスコのウェイターをしていたのだ。

(モテる)の2乗だった。

しかし、なんか違う。なんか物足らなかったのだ。

あの女もこの女も、みんな下らなかった。

「オレは今、激しく欲情しているっ!!」

と仁王立ちにさせる女は一人もいなかった。

「TOKIOはダメよ。女だったらHAMMAだぜ」

友人である蕪木孝政の言葉で、美樹はこの街に

足を踏み入れたのだった。

そして、香織と出会った。

DISCO『LINDY』は1943年型シトロエンの運転席がDJ・BOXになっていて、ホールは床から煙が出ているので、雲の上にいるような感じだった。

どんな内装をしようとディスコはディスコ。六本木のディスコであろうと横浜のディスコであろうと、あるいはオシャマンベのディスコであろうと、要はその空間に集まっている人種が問題であって、そう大差はないのだが「うーん、さすがあ、本場」と美

樹は感心してしまった。

また、美樹は店に入っすぐ、一人の女に目をつけた。

その娘はホールの手すりに寄りかかり、タバコを口にくわえたまんま、ボーッとしていた。

昔、プレイボーイ誌のインタビューでジミー・カーターが、多くの女性に肉欲の眼を向けてきたことを正直に認めていたが、ロナルド・レーガンはどうだろう？ はたまたブッシュは？

認めるかどうかはわからないが、レーガンやブッシュがその娘に肉欲の眼を向けることは確かだ。それぐらいいい女なのだ。それが香織だった。トーゼン、美樹の股間はときめいた。

「88—56—90」

美樹は香織に歩み寄り、そう耳許で囁いた。香織はキツとなって睨み返し、美樹をジロジロとながめた。

肉食動物の瞳の輝きだ。

